

安田女子大学児童教育学会

第28回研究大会

プログラム・要旨集

日時

平成30年6月9日(土)

9時～12時00分

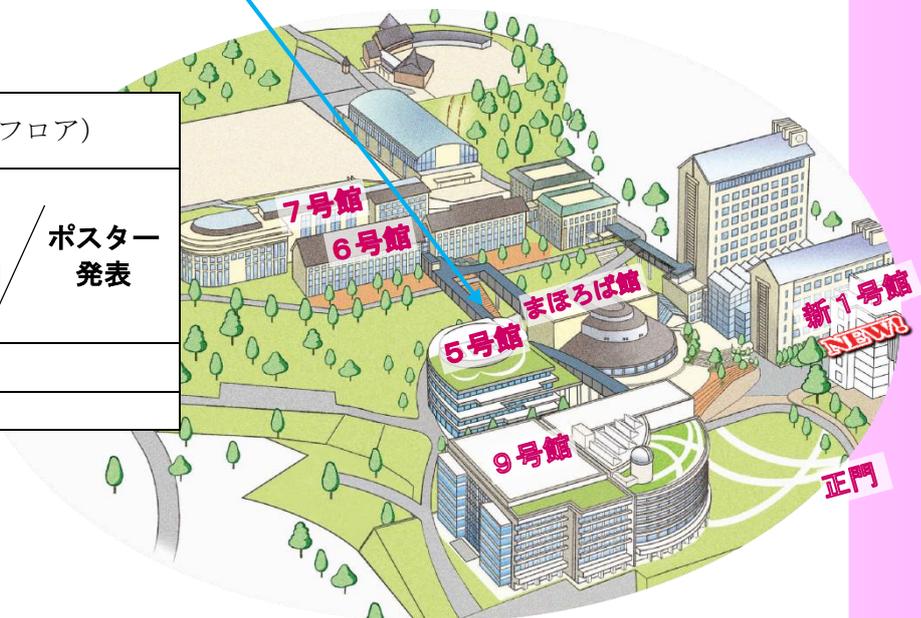
会場

安田女子大学 5号館

広島市安佐南区安東6-13-1

日程

| | | |
|-------|---------------|---------------------------|
| 9:00 | 受付 (5号館2階フロア) | |
| 9:30 | 研究発表 | 教育研究部門 / 実践的教育部門 / ポスター発表 |
| 11:35 | 総会 | |
| 12:00 | 終了 | |



<お問い合わせ先> 安田女子大学児童教育学会事務局

〒731-0153 広島市安佐南区安東6-13-1 安田女子大学教育学部児童教育学科内

メールアドレス jikyo.ace@yasuda-u.ac.jp / 電話 (FAX 兼) 082-878-9142

プログラム

<9:00 受付>

5号館2階フロア

<9:30~10:50 研究発表(教育研究部門・実践研究部門)>

研究発表(A会場)

5201教室

- 9:30 **気になる子の支援に関する研究**1
○杉山 彩乃(安田女子大学教育学部 学部生)
- 9:50 **小学校教科書語彙分析の研究**2
○江草 友里(安田女子大学教育学部 学部生)
- 10:10 **小学校教科書語彙分析の研究—国語科における言葉の世界の広がりについて—**3
○中川 水緒(安田女子大学教育学部 学部生)
- 10:30 **NIEに関する研究**4
○中島正明(安田女子大学教育学部)

研究発表(B会場)

5206教室

- 9:30 **幼保小接続カリキュラムの成果と課題 ~広島県三原市幸崎小学校区の実践より~**5
○村上 直子¹, 西川 ひろ子² (¹三原市教育委員会学校教育課, ²安田女子大学教育学部)
- 9:50 **保育所における運動遊び場面での気になる子どもへの保育士が行う支援と課題**6
○西川ひろ子(安田女子大学教育学部)
- 10:10 **大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床倫理的カリキュラムの開発(6)
—グループワークの試行的実施による検討—**7
○西 まゆみ¹, 西川ひろ子², 山本文枝³, 藤田依久子⁴, 高城 佳那⁵, 船津 守久⁶
(^{1, 3, 4, 6}安田女子大学心理学部, ²安田女子大学教育学部, ⁵静岡産業大学経営学部)
- 10:30 **大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床倫理的カリキュラムの開発(7)
—グループワークの試行的実施による検討—**8
○山本文枝¹, 西川ひろ子², 西 まゆみ³, 藤田依久子⁴, 高城 佳那⁵, 船津 守久⁶
(^{1, 3, 4, 6}安田女子大学心理学部, ²安田女子大学教育学部, ⁵静岡産業大学経営学部)

- 9:30 児童における劣等感の表し方についての研究9
 ○草田 愛莉紗¹，宮崎 久美子²（¹海田町立海田小学校，²安田女子大学教育学部）
- 9:50 ちがいを認め合い 個を表現できる集団づくり～少人数における主体的活動を通して～10
 ○溝本 真未（広島市立可部小学校）
- 10:10 養護教諭養成におけるシミュレーション教育の効果
 —「健康相談活動の理論と方法」における授業実践報告—11
 ○宮崎 久美子（安田女子大学教育学部）
- 10:30 国際理解教育における英語学習の位置づけ12
 ○大庭 由子（安田女子大学現代ビジネス学部）

<11:10～11:35 ポスター発表>

5号館2階フロア

1. 保育士がメンタルヘルスを保つための職場環境について13
 ○岡 彩乃¹，宮崎 久美子²（¹沼田東幼稚園，²安田女子大学教育学部）
2. 幼児および児童への音楽教育に関する事例研究
 —地域子育てイベントにおける「こども音楽教室」の事例から—14
 ○長友 洋喜（安田女子大学教育学部）
3. 発達障害の児童に対する「やさしい無視」という指導方針に関する考察15
 —悩みを分かち合い、明日の実践を切り拓く交流の場としての「yasuda 学びのひろば」の事例から—
 ○八木 秀文（安田女子大学教育学部）

※午前中はポスターを常時掲示しています。

※発表者がポスター前で説明・質疑を行う「責任滞在時間」は 11:10～11:35 です。

11:40～12:00 総会

5201教室

気になる子の概念に関する研究

杉山 彩乃

（安田女子大学）

1 研究の目的

教育実習のとき、4年生のクラスに、発達障害が疑われる子どもが1人いた。先生はその児童を気になる子だと言っていた。「気になる子」とは大学の講義の中で耳にしたことがあるが、どのような子どもを指しているのか分からなかった。

そこで、気になる子の定義について調べてみたいと思った。気になる子を支援するためには、気になる子の定義を知ることが必要だと考えた。

2 研究の方法

この研究では文献研究を行った。その際、雑誌の記事に限定して調査を行った。雑誌記事に限定したのは、「気になる子」について、どの分野の誰が初めに使い始めた言葉なのか、そしてその後の展開を見ることができ、現状では「気になる子」という言葉がどのように使われているのかを知ることができるからだ。

次に、今日までの研究で行ったことを述べると以下の通りである。

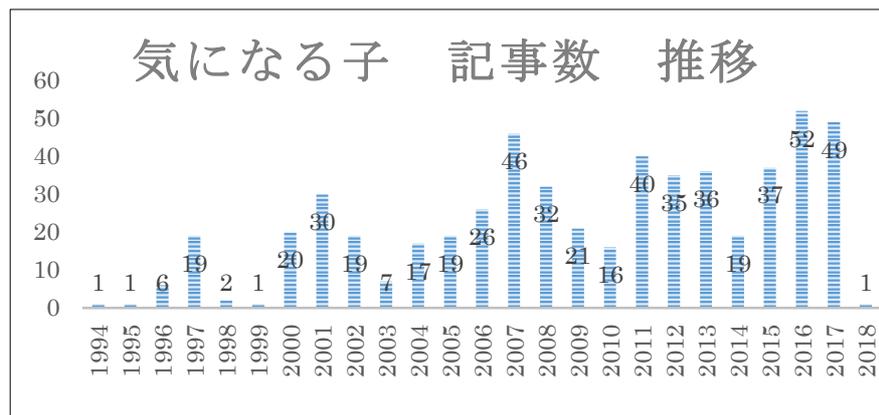
- (1) 国立国会図書館の蔵書目録(NDL - OPAC)から「気になる子」に関する記事を検索した。検索結果からエクセルでリストを作成し、図書館の文献複写サービスを利用して集め1編ずつ読みながら、内容を整理・記録した。
- (2) 「気になる子」に関する記事の刊行年別推移を調べた。
- (3) 記事に記述されている「気になる子」の定義の有無及びその記述について調べた。
- (4) 記事の分類分けを行った（保育・小学・中学・その他(高校・医療・福祉・本の紹介・言葉遣いなど)
- (5) (4)で示したその他を除く保育・小学・中学についての記事の分類（理論・実践理論・報告・調査報告など）
- (6) 記事の中で気になる子と認識されている子どもの男女比を調べた。

3 結果の概要

- (1) 「気になる子」を含む最初の記事が発行された1994年から2018年の記事数の552件の内訳を見てみると、2016年(52件)が最も記事数が多かった。また、2007年(46件)も多くなっているため、10年ほど前にも関心が高まっていたことが分かった。2010年代からは2014年(19件)に記事数が少なくなっているものの、継続して関心が注がれていることが分かった。

- (2) 「気になる子」は、まず幼児教育の中で用いられている言葉であることが分かった。保育の言葉として使われるようになり、その言葉がしだいに小学校教育の中で用いられるようになったと思われる。

- (3) 今まで読んだ文献の中で傾向を見てみると、「気になる子」という



言葉の定義は論者によって異なっており、学界や社会的に承認された定義は存在していないということ。

- (4) 記事の中で「気になる子」と認識された子どもは245人。男児192人(78%)、女児53人(22%)であり、男児が多かった。男児が「気になる子」として捉えられやすい傾向にあると考えられる。

4 参考文献

- (1) 牧野桂一「特別な保育ニーズに応えるために(32)気になる子どものことばの評価と支援のあり方(2)」『げん・き』165巻 pp.116 - 129 2018.01.
- (2) 長尾秀夫「臨床研究・症例報告 発達が気になる子どもの就学前診療の定式化：発達支援施設における6年間の就学前診療の分析から」『小児科臨床』70(7)=842 pp.1153 - 1161 2017.07. 他550件

第28回（平成30年度）

研究大会発表資料（研究発表）

小学校教科書語彙分析の研究

—音楽科における言葉の世界の広がりについて—

江草 友里

(安田女子大学)

1 研究の目的

- (1) 児童の言葉の世界は多様な経路を通して、広がり続けている。
- (2) 教科書は児童にとって最も大きな情報源である。
- (3) 児童の言葉の世界の広がりを知るために、教科書に焦点を当てた。

2 研究の方法

- (1) 音楽科を選択した。
- (2) 教科書は、広島県内小学校での採択状況から、最も多く採用されている教育芸術社の教科書を使用した。
- (3) 教科書の語句をすべて取り出し、エクセルファイルに記録した。
- (4) 平仮名、カタカナ、漢字の表記は各学年の教科書での記載のまま取り出した。
- (5) 歌唱教材、器楽教材等の作詞者、作曲者等は本文集計とは別に取り出した。
- (6) 取り出した語句を50音順に並べ替え、頻度を集計した。
- (7) 区分については次のように考えた。

- | | | |
|-------------|--------|-------------------|
| ①「自然・社会・人間」 | ③「楽器名」 | ⑤「擬音語・擬態語」 |
| ②「国名」 | ④「音階名」 | ⑥「平仮名・カタカナ・漢字・英語」 |

(8)分析の際のポイント

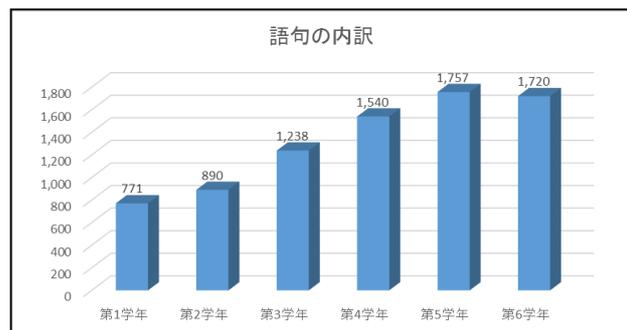
- ①6年間でどのくらいの言葉と出会うのか。
- ②6年間の中でどのような過程で語彙を獲得していくのか。
- ③教科間での共通点や差異はあるのか。

3 結果の概要

(1)取り出した語句の総数は7,916語

(2)学年別の語句数

- 第1学年 [771語]
 第2学年 [890語]
 第3学年 [1,238語]
 第4学年 [1,540語]
 第5学年 [1,757語]
 第6学年 [1,720語]



(3)頻度の高い語句

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 第1位 「音(おと)」 [317回] | 第4位 「歌(うた)」 [158回] |
| 第2位 「旋律(せんりつ)」 [208回] | (4)楽器名は「リコーダー」国・地名は「ドイツ」が最頻出 |
| 第3位 「ページ(ぺえじ)」 [194回] | (5)英語は13語。第2学年から登場。(BINGO) |

4 参考文献

『小学生の音楽1～6』 教育芸術社 2018。

(6)カタカナ語句は566語(取り出した語彙の総数の約7%)

小学校教科書語彙分析の研究
—国語科における言葉の世界の広がりについて—

中川 水緒
(安田女子大学)

1 研究の目的

動機

- (1) 小学校において児童の言葉の習得は教科書からが多い。
- (2) 国語科では他の教科に比べ、多くの語句に触れる機会がある。
- (3) 国語科は、すべての科目の中でもっとも授業時数が多い。
- (4) なぜ、教科書にはマスコミを通した流行語や新語が使われていないのか。

目的

- ① 最終的にそれぞれの発達段階に応じた指導法を考慮すること。
- ② 自らの指導力を高めること。

2 研究の方法

- (1) この研究では国語科教科書の語句をすべて取り出し、集計・分析に取り組んだ。
- (2) 教科書の選択については広島県内の小学校での平成27年度の採択状況から最も多く採用されている東京書籍の国語科教科書を使用した。
- (3) 語句の取り出しは児童が目にすると考えられる本文の部分に限定した。
- (4) 語彙分析を行う際に重視した点
 - ① 教科書にどんな語句が掲載されているのか。
 - ② それぞれの語句頻度はどうなっているのか。
- (5) 平仮名、片仮名、漢字の表記は各学年の教科書に記載のまま取り出した。
- (6) 取り出した語句を50音順に並び替え、頻度を集計した。

3 結果の概要

- (1) 現時点での主な集計結果
 - ① 教第一学年の国語科教科書の語句の取り出し。
 - ② 取り出した語句の総数は1,760語
 - ③ 一年下で初めてカタカナを学習する。(例. サラダ) ただし、学習した後、多用されない。
 - ④ 一年生の教科書でもっとも多く使われる言葉は「こと」(終助詞) 68回である。
 - ⑤ 児童の身近な言葉(動物・自然・家族・友達)に関する語句が多く使われている。
 - ⑥ 一年生の段階ではとびらのページはない。
 - ⑦ 上学年で学習する漢字がルビ付きで使用されている。(は 第三学年)
 - ⑧ 六学年を通して取り組む単元は一年生の教科書から難しい言い回しが使われている。
 - ⑨ 説明文を学習するのは一年下の教科書(いろいろなふね)が初めてである。
 - ⑩ 一年上の教科書では書く活動はないが、下からノートに書いて学習する活動が加わる。
 - ⑪ 話し言葉と地の文の違いの意識や接続詞、ひらがなの場合に応じて使い分けることは下の教科書の後半から徐々に意識した学習に入る。
- (2) 今後の課題
 - ① 現段階では、第一学年の教科書語彙分析まで終わっているため今後も継続して第六学年までの語彙分析を進めていくこと。
 - ② 最終的に分析の結果、教科書で使われている語句に偏りがあるのかを研究すること。
 - ③ 語彙分析を実際の指導にどう生かしていくのか。

4 参考文献

- ① 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編』 文部科学省 2018.
- ② 『新編 新しい国語 一』 東京書籍 2015.

第28回(平成30年度)

研究大会発表資料(研究発表)

NIEに関する研究

中島正明

(安田女子大学)

- 1 目的: ICTを活用してNIEを実践することでESDを実現する。
- 2 内容: 知る楽しさ・おもしろさ⇔知識の増大⇔思考力⇔想像力・創造力⇔表現力⇔知る楽しさ・おもしろさ
- 3 方法: 新聞記事の切り抜きを元にしてデータベースを作成する。

図1 新聞記事データベースのメイン画面

このボタンを押すと、その自治体に含まれる各地区などの記事を表示する。

図2 豊栄

| | | |
|------------|-----------|---|
| 2017/07/23 | 中国新聞 東広島市 | 本のおみやげ 臨時図書館人気 職員出向き要望聞く 豊栄 4地域センター巡回 |
| 2016/11/13 | 中国新聞 東広島市 | 福富・豊栄・河内の魅力 19ヵ所でスタンプラリー |
| 2016/11/03 | 中国新聞 東広島市 | 観光バンプレットを2年ぶり改訂 福富・豊栄・河内 東広島 |
| 2016/07/17 | 中国新聞 東広島市 | <投書> 自まんでできる豊栄町 |
| 2016/04/23 | 中国新聞 東広島市 | オオサンショウウオ田への流入防止 東広島市豊栄町椋梨川の幼生 引越し作戦「東広島市」が保護対策 |
| 2016/04/08 | 中国新聞 東広島市 | ジビエ料理でまちおこし 東広島市の県産品が処理 販売会社 鳥獣対策兼地 地元カフェで提供 イノシシ シカ肉 豊栄町 |
| 2016/04/06 | 中国新聞 東広島市 | 東広島でオオサンショウウオ緊急保護 体重減 餌不足の恐れ 豊栄町 |
| 2015/12/30 | 中国新聞 東広島市 | 豊栄 中学校を文部科学大臣表彰東広島キャリア教育を評価 |
| 2014/01/21 | 中国新聞 東広島市 | 山仕事児童ら学ぶ豊栄シタケ菌植え付け |
| 2012/12/31 | 中国新聞 東広島市 | 元旦新聞あす35号 豊栄の本宮八幡神社1979年から毎年発行歴史記憶に総集編も |
| 2011/01/28 | 中国新聞 東広島市 | 豊栄で連携教育勉強会東広島市の住民設立保育所・小学校中学校高等学校垣根越え |
| 2010/08/07 | 中国新聞 東広島市 | Tシャツで豊栄PR学校と商店共同製作東広島市 |
| 2009/11/15 | 中国新聞 東広島市 | 個性豊かな陶器モアイ像豊栄で教室児童ら20人が挑戦 |

図3 理科-化石

| | | |
|---------|----------|----|
| 国語 | | |
| 算数 | | |
| 社会 | | |
| 理科 | 化石 | 検索 |
| 生活 | 愛護 | |
| 音楽 | 暖かさ | |
| 家庭 | アルカリ性 | |
| 園工 | 異極 | |
| 体育 | 運搬 | |
| 外国語 | 映像 | |
| 特別な教科道徳 | エネルギー | |
| 特別な活動 | 往復 | |
| 総合的な学習 | おしべ | |
| | おもり | |
| | 概念 | |
| | 回路 | |
| | 科学学習センター | |
| | 科学的 | |
| | 鏡 | |
| | 火山灰 | |
| | 化石 | |

| | | |
|------------|-----------|---|
| 2017/12/18 | 中国新聞 庄原市 | <投書> かせき8こ見つけた 化石 |
| 2017/06/08 | 中国新聞 山口県 | 30万年前 最古の現生人類 10万年更新 モロッコで化石 |
| 2017/06/06 | 中国新聞 山口県 | 新種 恐竜卵化石か 福井の博物館発表 1965年 山口県下関の白亜前期地層から発見 |
| 2017/04/27 | 中国新聞 島根県 | 石見 豊ヶ浦 集客に力 資料館・案内所1日オープン 浜田市 散在の化石 収集進める |
| 2017/03/15 | 中国新聞 北陸地方 | 化石密集 3386点発掘 福井県 白亜紀前期の地層 |
| 2017/02/26 | 中国新聞 広島市 | 西区 鈴峯女子短期大学 閉校前にイベント 化石や顕微鏡 科学わくわく |
| 2017/02/22 | 中国新聞 広島市 | 西区の鈴峯女子短期大学 閉校前 子ども向けに企画 化石や水晶 触って観察 |
| 2016/10/01 | 中国新聞 岡山県 | 106センチ 恐竜の足跡化石 岡山理科大学 モンゴルで発掘 |
| 2016/08/09 | 中国新聞 四国地方 | 1986年に発掘した化石 植物食恐竜だった 香川初の発見 |
| 2016/07/02 | 中国新聞 九州地方 | シーラカンスの新種化石 北九州など研究グループが調査 東南アジア 2億3000万年前の地層 |
| 2016/05/11 | 中国新聞 広島県 | 「県の石」選定 広島 花こう岩 山口 植物化石 日本地質学会 中国5県15種類 |
| 2016/04/06 | 中国新聞 北陸地方 | 小動物化石 新種と判明 石川県白山市で発見 歯の突起 独特の三日月状 |
| 2015/07/15 | 中国新聞 北陸地方 | 大型ティラノザウルス日本にも歯の化石長崎で発見推定全長10メートル |
| 2014/05/19 | 中国新聞 外国 | 世界最大の恐竜が推定全長40メートル体重77トンアルゼンチンで化石発見 |
| 2013/11/29 | 中国新聞 島根県 | 隠岐で新種の二枚貝化石島根大学など1200万年前の地層から2種 |
| 2012/08/11 | 中国新聞 庄原市 | 比和博物館で児童クジラ化石に感激 |
| 2012/07/21 | 中国新聞 庄原市 | 比和博物館クジラ化石や館物展示地学分館きょう開館 |
| 2011/07/23 | 中国新聞 廿日市市 | みやじまマリナ水族館の仲間たち6カブトガニ生きた化石繁殖に挑む宮島 |
| 2011/04/20 | 中国新聞 広島市 | 来夏開館の比和博物館地学分館模型や化石展示空飛ぶクジラ太古いざなう |
| 2011/01/08 | 中国新聞 近畿地方 | 小3,よろい竜化石みつけ兵庫で体験発掘中 |
| 2009/09/12 | 中国新聞 庄原市 | クジラの化石7種200点展示比和博物館分館整備へ庄原市支所を改修講演会も |
| 2006/06/22 | 中国新聞 尾道市 | キッズ『科学は楽しい』尾道・土堂小児童に広島大助教講義土堂サタデーキッズ化石 |

第28回（平成30年度）研究大会発表資料（研究発表）

幼保小接続カリキュラムの成果と課題～広島県三原市幸崎小学区の取組より～

村上直子・西川ひろ子

1. 研究目的

幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るためには、幼稚園・保育所・認定こども園（以下「園・所」という。）と小学校の双方が接続を意識する期間を「接続期」（5歳児から小学校第1学年までの期間）というつながりで捉え、子供の発達と学びを連続させていくことが必要である。このため、年長児の多くが入学する小学校と「園・所」が連携して幼保小接続カリキュラム（以下「接続カリキュラム」という。）を研究・開発した。本研究は、平成27・28年の広島県教育委員会の「幼保小接続カリキュラム研究開発事業」の指定を受けて接続カリキュラムの作成、実践をすすめていく中で、幼児期の教育の充実を図ることが目的である。

2. 研究の方法

①調査対象

三原市立幸崎小学校，幸崎幼稚園，幸崎保育所

②研究の手続

(1) 幸崎学区の小学校，幼稚園，保育所の幼保小の円滑な接続を図ることをねらいとした「園・所」におけるアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムを作成するなど、「接続カリキュラム」の研究開発を行う。

(2) 幼児の実態に応じながら，幼児期の終わりまでに育てほしい幼児の姿及び小学校1年生の終わりまでに育てほしい児童の姿を住まえ，具体的な接続の視点を設定した上で，「接続カリキュラム」を実施し，成果を検証する。

(3) 研究の円滑な推進のため，「接続カリキュラム作成協議会」を置き，事業を推進するため，保育・授業参観，進捗状況の検証，協議等を行う。

3. 研究結果

幼保小が地域や子どもの状況に応じて「接続の視点」を設定し，接続カリキュラムを作成することができた。特に指定2年次には，作成した接続カリキュラムをもとに，実践・検証を行った。大学講師の適切な指導助言のもと，定期的な参観および協議を重ねることにより，保育・授業改善を進めることができた。それにより，めざす子どもの姿が生活の中で見られるようになった。特に幼稚園，保育所の保育内容，保育技術等のカンファレンスが図られ，保育の質の向上が進められた。

今後も，幼児・児童の発達段階の理解や教育課程，指導方法の違いを，幼保小の教職員が相互の理解を高め，それぞれの保育や授業に生かせるよう，カリキュラムに沿った実践を充実させていく必要がある。

第28回（平成30年度）研究大会発表資料（研究発表）

保育所における運動遊び場面での気になる子どもへの保育士が行う支援と課題

西川ひろ子

（安田女子大学）

1. 研究目的

気になる子ども達への支援や援助に悩む保育者は多い。障害児保育に関する研修会は、盛んではあるが、発達が気になる子ども達の個人差が大きく、研修をうけても実際に行える支援との乖離を訴える声も多い。さらに、気になる子どもは勝敗がある集団遊びでは遊びの場から逃亡し、ルールを守ることが出来ないなどの問題行動を起こりやすい。しかし、その一方で運動遊びは自己開放ができ、気持ちを発散し、体力面の育ちを促すにも有効でもある。では、実際の保育所では、運動遊び場面での気になる子どもに対して、どのような支援を行っているのだろうか。また、保育士はどのような課題や困り感を感じているのであろうか。この二点を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究の方法

①調査対象者

H市公立保育所保育士 81名 回収率 100%

②調査項目

「気になる子どもに対しての運動的支援をされていますか。」など17項目

3. 研究結果

「クラスの中で気になる子どもの人数は？」との問いに対して、「いない」との回答が2名（2.5%）しかなかった。ほとんどのクラスや園に気になる子どもが在園していることが明らかになった。また、63%の保育者が「3人以上」と回答しており、保育士一人だけでは十分に気になる子どもに適切に対応することのできない現状が分かった。また、「気になる子どものタイプは？」との問いに対して、「集中困難で落ち着かない」が74%、「衝動」が57%、「こだわりが強い（固執）」が54%。「集団活動に入ることが苦手」が52%であった。保育士は「集団活動に入ることが苦手な理由」を、「初めての活動が苦手」と捉えているのが79%、「外からの刺激が気になる」と判断しているのは、71%と高かった。では、集中困難で落ち着かないタイプの子どもの対する保育士への支援は、多岐にわたっての回答が多く、幾つかの支援を組み合わせで行われていることが分かった。特に、「無理やり活動に参加させず見守る」が58%、「自己肯定感を高める」が53%、「刺激を少なくし、集中しやすい環境を工夫する」51%、「褒めるときはみんなの前、注意は個別」が46%、「カードを使った視覚援助」「席を先生の前にする」「加配保育士をつける」がいずれも38%と高かった。保育者は子どもが集中しやすいように環境を整えるだけでなく、子どもに無理させないに支援することにも配慮していた。次に「気になる子どもへの運動面の支援を行っているか？」に対して、「行っていない」との回答は12%で、ほとんどの保育現場で、運動的支援が行われていることが分かった。しかし、運動的支援の実践は、「時々行っている」と答えた人の方が40%と最も多かった。運動的支援は、効果的であると分かっているにもかかわらず、具体的に何をすればよいのか、不明であるという保育者もいるかもしれない。「支援や保育で行われている運動は？」との問いに対して、「リズムに合わせて踊る遊び」が73%と最も多かった。また、「走る遊び」は、53%、「バランスをとる遊び」が44%と高かった。運動的支援により、気になる子どもに変化が見られたかという問いでは、「落ち着くようになった」「長い間待つことができるようになった」という回答が多かった。運動的支援は体力が向上するだけでなく、園生活で、子どもが落ち着いて活動できる等の変化を感じていることが分かった。

大学生のコミュニケーション能力育成のための

臨床心理学的カリキュラムの開発(6)

—グループワークの試行的実施による検討—

○西まゆみ¹ 西川ひろ子² 山本文枝¹ 藤田依久子¹ 高城佳那³ 船津守久¹

(1 安田女子大学心理学部 2 安田女子大学教育学部 3 静岡産業大学経営学部)

1. 研究目的

本研究は、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成する、発達障がい等支援のためのカリキュラムを開発することを目的とするものである。カリキュラムの開発においては発達障がいによる二次障害の発症にかかわる問題に配慮し、コミュニケーション・スキルの向上及び行動の変化に加え、自己概念の肯定的変化をねらうものとする。また、発達障がい者だけではなく全ての大学生の自尊心や自己肯定感を高めることもねらいとする。報告者らは、ホームルーム形式のクラス単位で行うカリキュラムについての検討を試行的に行った。具体的には、グループワークを5回実施し、その前後における自己概念、コミュニケーション・スキル、自己肯定感の変化について調査した。本報告では、このうち、教育学系学部所属の女子大学生(3年生、44名のクラス)を対象に行ったグループワーク(実施期間2017年11月9日から2018年1月25日)について、行ったグループワークの意義を考察する。

2. グループワーク全体の意義

いずれもコミュニケーション能力の向上と自己肯定感の醸成に役立つと言える。教育学系学部所属の学生にとっては、特に、学級づくり、または、学級の保護者のチームづくりのワークとしての意義があると言える。

3. 各グループワークの意義

1回目「4つの窓」(2人ペアで自己紹介する)

冒頭に教員の自己呈示と聞き方教示により、モデルを見せる。新しい人間関係を作るのに有効であると言える。聞いてくれることが効果。対一のやり取りで、注意を集中させやすい。

2回目「セールストーキング」(2人ペアでロールプレイ式の会話をする)

話題カードを用意したことにより、内容をあらかじめ準備して話すことができ、失敗が少ない。

3回目「3人でトーク」(3人で提示したテーマについて話し合う)

話し合いのポイントはみんなが楽しく、同じ分量話すことであり、このための工夫を考えさせることに意義がある。

4回目「新聞紙でレターづくり」(4人で目的にもとづいた作業を行う)

言葉を極力使わないコミュニケーションを通して役割分担を考えることができる。道具を使ったワークで、自分のやるべきことが自然に発生するので、役割が自然に見つかる利点がある。

5回目「私の四面鏡」(5~6人でお互いの印象について伝えあう)

肯定的な形容詞のみを提示したカードを用いる。意外な形容詞が返ってくることによって、自分について新たな意味を発見することができる。

大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの 開発（7）—グループワークの試行的実施による検討—

山本文枝¹，西川ひろ子²，西まゆみ³，藤田依久子⁴，高城佳那⁵，船津守久⁶

^{1, 3, 4, 6}安田女子大学心理学部，²安田女子大学教育学部，⁵静岡産業大学経営学部

1. 目的

自閉症スペクトラムに代表される社会性の発達障がいグレーゾーンにいる大学生は支援につながりにくいことから、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成する支援のためのカリキュラムを開発することを目的とする。その際に、発達障がいにおける二次障害の発症にかかわる問題に配慮し、コミュニケーション・スキルの向上及び行動の変化に加え、自己概念の肯定的変化をねらう。また、全ての大学生の自尊心や自己肯定感を高め、社会に出るための意欲向上や自信の獲得につなげる。本報告では、カリキュラム検討の一環として、ホームルーム形式のクラス単位で行う授業において教育現場で行われるグループワークを試行的に実施し、自己概念、コミュニケーション・スキル、自己肯定感の変化について質問紙による調査を行った。

2. 方法

調査対象者：教育学部に所属する女子大学生 44 名。分析は、欠損値があったものを除く 29 名を対象とした。平均年齢 20.7 歳。

調査時期：2017 年 10 月～2018 年 1 月。

調査内容：研究者が担当するホームルーム形式のクラス単位で行う授業 15 回のうち 5 回の一部(約 15～20 分)を利用しグループワーク（内容は大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発（6）を参照）を実施した。

質問紙の構成：①自己概念の形容詞(榎本(2002)で用いられた形容詞 45 項目)から山本ら(2017)において AQ と有意な相関があった 12 項目、②自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)を 4 件法に修正した 50 項目（実施前のみ回答）、③コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORES(藤本・大坊, 2007)6 因子 24 項目、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)の自己受容因子 4 項目と自己閉鎖性・人間不信因子 8 項目を使用した。実施前と後でそれぞれ質問紙に回答してもらった。質問紙は匿名で実施し、個人情報保護、成績評価に一切関係しないことなどを記載し口頭でも伝えた。また、毎回「ふりかえりシート」に記名式でグループワークの自己評価および感想を記入してもらった。

3. 結果と考察

全体における実施前後の変数の得点において、自己概念の「明るい」のみ統計的に有意に高くなっていた ($t(28)=-2.06, p<.05$)。この自己概念の実施後のプラスの変化量と AQ に有意な正の相関がみられた ($r=.481, p<.01$)。このことから、コミュニケーションに困難さがあるほど、「明るい」という自己概念に影響を与えた可能性が考えられる。中でも AQ の下位因子である社会的スキルの不足 ($r=.418, p<.05$) と注意の切り替えの困難さ ($r=.379, p<.05$) との間に関連がみられた。AQ とその他の変数における相関分析において、自己肯定感の自己受容因子 ($r=-.440, p<.05$) と自己閉鎖性因子 ($r=.465, p<.05$) の間にみられた有意な相関が、実施後に変化した ($r=-.159, n.s.; r=.275, n.s.$)。また、実施前に AQ とコミュニケーション・スキルの表現力因子の間にみられた有意な負の相関 ($r=-.696, p<.01$) が、実施後に変化した ($r=-.358, p<.10$)。今後は、グループワークのどのような要素が、コミュニケーションに困難さのある学生に肯定的変化を与えるのかについて詳細に検討する。

児童における劣等感の表し方についての研究

草田愛莉紗（海田町立海田小学校）

宮崎久美子（安田女子大学）

【背景】

近年、学校現場ではいじめの問題が喫緊の解決しなければならない課題となっている。その背景には、自分の居場所を見出せない、意識と行動にずれを引き起こしている多くの子どもたちがいると言われている。その内面には「自分に自信が持てない」「やる気が出ない」などの自己肯定感や自尊感情の低さがあるとも言われている。そのような児童への支援の方法を考えるために、児童が発するサインを見落とさないようにすることが重要である。そのため、学校生活の中でも主に学習場面において、児童がどのような時に劣等感を感じ、それをどのようなサインとして表出するかを知りたいと考えた。

【目的】

本研究は、児童の劣等感の表し方を明らかにし、児童が劣等感を感じる場面を予測し、児童への支援をいち早く、そして的確に行うことができるようになるための示唆を得ることを目的とする。

【方法】

(1) 劣等感、心理的ストレス、学校嫌い、失敗をキーワードに先行研究から、児童が劣等感を感じる場面のデータを収集し分析する。(2) A小学校における児童の学校生活を観察し、劣等感と関連していると思われる行動を収集し、分析する。

【結果と考察】

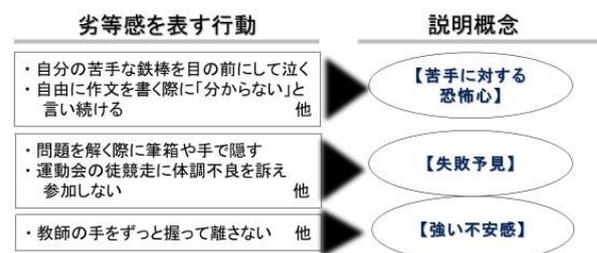
本研究の中で核となる劣等感という言葉について、自分の理想や、他者との比較から生まれる感情と定義づけて研究を行った。結果としては、劣等感を感じる時は発表などの多くの人の目に触れる場面が多く、他者の存在が必ず近くにあるということが明らかになった。劣等感を感じる行動としては、物を噛んだり、厳しい口調で言葉を発したりするなど、児童の行動に対してそれを観察する側の人間が、劣等感を表しているのではないかとという視点で観察をしないと見落としでしまいそうな行動が多かった。

以上の結果から、劣等感を感じる状況というのは、最初の言葉の定義通り自分の理想と比較する場合と、他者と比較する場合が見られた。また、学校生活においてみんなの前で発表する場面というのはほぼ毎日あることであるので、そこで嫌だからと逃避したり、劣等感を形成させたりするのではなく、学習に対して前向きな気持ちになるようにするための支援が必要である。そのために、教師は普段と様子が違うなどの小さなサインだとしても気に留めて声を掛けることで、児童理解が深まり、信頼関係を築くこともできるため、児童の心に寄り添った支援が可能になると考える。

今後の課題としては、更に文献検討や観察研究を行いデータ量を増やして、説明概念の妥当性や普遍性を図ること、劣等感を感じている児童に対しての支援の方法を、それぞれの児童の背景や個性に合わせて構築していくことである。

【参考文献】

- 1)青島朋子(2008) 子どものメンタルヘルスを支える【教師編】自尊間尺度,児童心理 62 巻,129-135
- 2)桜井茂男(2000) 問題行動の底にあるもの:子どもの不安とその克服,教育出版
- 3)井上信子(1986) 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連,教育心理学研究 34 巻,10-19



第28回（平成30年度）研究大会発表資料（研究発表）

ちがいを認め合い個を表現できる集団づくり

～少人数における主体的活動を通して～

溝本 真未

（広島市立可部小学校）

1. 学級の状況と本実践研究の目的

筆者は、今年度より本校に転任となり5年生の担任となった。4月当初の学級の実態としては、全体的におとなしい印象で授業中の挙手も少なく、一人一人があまり主張することを好んでいない様子が伺えた。また、学校生活の様々な場面において児童同士が自主的に関わろうとする姿が見られず、他者の言動に対してあまり関心をもっていないようであった。

この実態から本実践研究では、少人数におけるいくつかの主体的活動を通して、児童一人一人がそれぞれの違いを認め合い、自分の思いを表現できる集団づくりの在り方について明らかにすることを目的とする。

2. 実践研究上の仮説と実践展開の方途

児童が少人数におけるいくつかの主体的活動を通すことによって、一人一人がそれぞれの違いを認め合い、自分の思いを表現できる集団づくりにつながると仮説を立てる。方途としては、少人数における主体的活動であるプロジェクト活動と班長会議を柱として実践展開をする。またこの二つの柱を価値語の指導で支えながら、主体的活動を通して生じる一人一人のちがいを認め合う場面を意図的に設定する。

3. 成果と課題

二つの少人数における主体的活動を柱として実践しながら、その活動を価値語の指導で支えたことで、まず児童は友達と関わるよさや自分達で考えて活動をする楽しさを知ることができるようになった。そして、一人一人のちがいを知ることができるようになってきた。お互いのちがいを認め合うための第一段階と言える。

一方で、自分が関わっている活動にしか興味や関心がなく、他者の活動にはまだあまり目を向けることができていないのが現状である。それだけでなく、一人一人のちがいを知ることができてもそれを認めたり受け入れたりすることには、まだ抵抗がある。今後の課題としては、児童が一人一人のちがいをいかにして認め合うことができるように場面を設定していくかということと、それに伴ってどのようにして個を表現できるようにさせていくかということが挙げられる。

【参考文献】

多田孝志『対話力を育てる－「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション－』教育出版、2006

堀公俊『ファシリテーション入門』日経文庫、2004

吉本均『現代学習集団づくり講話』東方出版、1981

菊池省三・菊池道場『菊池省三365日の学級経営 8つの菊池メソッドでつくる最高の教室』明治図書出版、2018

養護教諭養成におけるシミュレーション教育の効果

—「健康相談活動の理論と方法」における授業実践報告—

宮崎久美子

（安田女子大学）

【目的】養護教諭には採用当初から、児童生徒の健康保持普遍について実践できる資質能力が必要であり、そのためには養成段階において、質の高い教育内容と教育方法の工夫が求められている。大学教育においても知識重視から能力重視の改革が進められ、アクティブラーニング型授業が導入されている。養護教諭養成教育では、シミュレーターを用いた教育が救命処置や特別支援教育にかかる医療的ケアに関して実施されているが、活発とはいえない現状である。普段の学校生活の中で展開される養護実践を、可能な限り実際に近づけ、思考も行動も活性化する授業形態により、知識と技術が統合された実践力を身につけることも求められる。

本学科養護教諭養成コースにおいて、模擬保健室を使用した健康相談活動のシミュレーション学習を実施し、専門的知識・技術・態度の統合を図り養護実践力を身につけることを目的とした授業を展開した。

【方法】養護に関する科目の「健康相談活動の理論と方法（2単位）」において、（1）体重測定が嫌で身体計測の日に欠席をした女子児童の身長・体重の計測と視力検査、（2）最近、無断欠席の多い男子生徒の身長・体重の計測と視力検査の2件の事例について、2名の学生が養護教諭となり対応のプロセスをシミュレーションした。観察者の他の学生は感想や省察したことを記述した。

【結果】学生（22名）の記述（振り返り）には、全80件のコードがあった。シミュレーションを通して学習した内容として以下の17項目にまとめた。

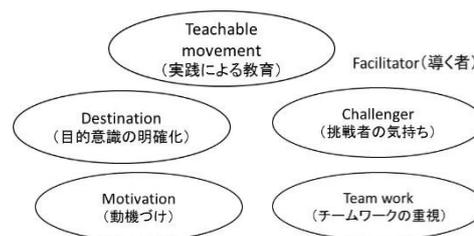
| シミュレーションを通して省察したこと | | |
|--------------------|-------------|----------------|
| 事前のアセスメント | 児童生徒の理解 | 児童生徒に関心を寄せる |
| 丁寧に観察する | 安心感を与える | 正確なフィジカルアセスメント |
| 居場所づくり | 信頼関係を作る | 保健指導につなげる |
| 話しやすい雰囲気作り | カウンセリングマインド | 動機づけをする |
| 一つ一つに应答する姿勢 | 子どもの成長を支持する | 共に行動しようとしている |
| 児童生徒を尊重する | 養護教諭の思いを伝える | |

【考察】シミュレーション教育とは事実そのものではなく、ある実態を他の手段によって真似し、再現したものを教育現場に取り入れたことを言う。実際に体験することと同じように人やものに関わり、再現（設定）されたその状況や問題に反応することにより学びを得ることを言う。養護教諭役の学生は児童生徒の問題解決を図るという目的を持って対応し、観察者も目的達成のために効果的であったことや改善点を省察できていた。また、模擬保健室という現実を似せた場が存在することにより、学習者の養護教諭への志向性を高めることにもつながったようである。

さらには、「先生はいつでも待っているよという気持ちが優しく伝えられていた」や「生徒が学校に来れる小さなきっかけが見つかったように感じた」など、シミュレーションすることで具現化された養護教諭の職務の特質と保健室の機能を生かした実践知を学習していた。

一方で、技術の不確かさ、児童生徒の対応の難しさ、教育観や使命感を持つことの重要性を全員が感じ取り、今後学習し身に付けなければならない力量について省察していた。

今回のFacilitatorは児童生徒役の教員であったが、そのかもし出す臨場感は学生に困惑感や緊張感を与えると同時に、意欲とヒントを導き出せることが出来たのでよかったと考える。



シミュレーション教育の概念図 (片田ら, 2007)

国際理解教育における英語学習の位置づけ

— ニュージーランドのアイデンティティ醸成教育と比較して—

大庭 由子

安田女子大学現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科

2020年から英語学習が教科として導入され、総合的学習の時間の国際理解、外国語学習の時間配分がかなり変更になることは必至である。下記の表は現在の国際理解教育の実施状況を総合的学習の時間を利用して行っている実施状況である。今後はこの中の外国語会話に相当する「英語」が教科として小学校5・6年に配置され、これまでの興味としての外国語学習は小学校3・4年生に下ろされてくるのである。

英語学習はそもそも国際理解教育の一環として導入され、本格的には中学校から学ぶことになっている。それでも語学力が日本人は弱いからという理由で、ついに小学校から外国語学習として「英語」が「教科」として教えられることになった。

ここでまず考えなければならないのは、英語学習ありきではなく、そもそも国際理解とはどのようなことかを理解しながら進めるべき外国語学習である。無目的な学習ではその意欲が高まることはないからである。と同時に、文部科学省の提唱する「国際理解教育」のありかたを再考する必要がある。文部科学省の示した国際理解教育において、外国語の占めるところは「コミュニケーション能力」の一部に過ぎなかったはずだ。この提唱において特に注目すべきは、むしろ「国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること」ではないだろうか。本報告においては、この点から鑑み、多文化社会ニュージーランドにおける「国際理解教育」としての社会科学学習を、今後の英語を含む「国際理解教育」の日本での在り方の一つとして紹介することとする。

国際理解教育の実施状況 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryou/04102501/001/001.htm

① 小学校編

| 学習活動 | 横断的・総合的な課題 | | | | | |
|------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 国際理解 | 外国語会話 | 情報 | 環境 | 福祉・健康 | その他 |
| 第3学年 | 58.6% | 48.8% | 57.4% | 42.4% | 39.6% | 15.5% |
| 第4学年 | 59.3% | 49.6% | 58.0% | 60.2% | 50.6% | 11.7% |
| 第5学年 | 63.1% | 51.5% | 61.7% | 55.7% | 46.8% | 14.9% |
| 第6学年 | 69.4% | 54.1% | 61.6% | 40.0% | 48.8% | 18.7% |
| 全体平均 | 62.6% | 51.0% | 59.7% | 49.6% | 46.5% | 15.2% |

注：パーセンテージは全学校数に対する該当学校数を示す。複数回答可。

「外国語会話」は「国際理解」を実施する学校のうち外国語会話を取り入れている学校数の割合
 （『公立小・中学校教育課程編成・実施状況調査（平成15年 文部科学省）』より）

保育士がメンタルヘルスを保つための職場環境について

岡 彩乃（沼田東幼稚園）

宮崎久美子（安田女子大学）

【背景】

教師や保育者は対人援助職といわれる職種である。対人援助職の仕事は人間を相手にする仕事であり、成果が目に見えにくいいため、仕事に対する達成感や自己肯定感が得られにくいという特徴を持っている。

また、保育士を取り巻く状況の変化により、多様な保育ニーズへの対応をはじめ、保育士が担うこととなった役割は拡大している。その上、保育士の職場環境ストレスについては人間関係に関して大きな課題を抱えていることが明らかとなっている。また新人保育士は、中堅保育士やベテラン保育士に比べると心の健康度が低いことが分かった。その要因として、自信や達成感を得られる体験が乏しく、働き甲斐を見出せていないことが考えられるとされている。さらに昨今の保育士不足や待機児童の問題は、国レベルで解決しなければならない喫緊の課題となっている。

【目的】

本研究は、保育士のメンタルヘルスに焦点を当て、ストレスに感じること、受け止め方、その対処法などを調査し、保育の経験年数及び職場環境との関連性を検討する。保育士が働きやすいよりよい職場環境を明らかにし、自身のキャリアに役立つ示唆を得たいと考えている。

【方法】

A市の公立保育園に勤務する保育士12名を対象に質問紙調査を実施した。調査の参加は自由意志であること、施設名・個人名は特定されることはないこと、データの処理及び管理の方法を、施設長に説明し同意を得、調査用紙にも同様の説明を明記した。

【結果と考察】

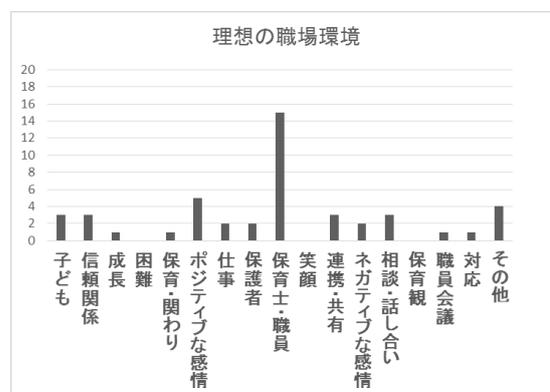
分析の結果、まず保育士は、仕事量の削減と良好な人間関係を望んでいることが分かった。さらにメンタルヘルスを保つことと、達成感を得られることが関係しているのではないかと考えられた。これは、自分の仕事を認められたことや仕事をやり切ったと感じられるときに働きがいを感じていたという結果からである。一方で働きがいを感じられない保育士は、多忙感から心に余裕がないために感じられないという結果が得られた。

希望する職場環境の結果から、新人では、上司や先輩保育士からアドバイスを受けたり、相談したりしたいため、保育士同士助け合いのできる職場を望んでいた。中堅では、新人保育士の理想とする環境に加えて、臨時職員の働く条件が整っていることをあげていた。ベテランでは、今までの経験から、職員の間人間関係に加えて職員の体制が整った職場を理想としていた。

本研究から、保育士がメンタルヘルスを保つための職場環境にするために必要なことは、保育士が、人間関係を良好に築くための支援を行うことであると考えられる。そのために、横の関係だけでなく、上下の関係も築けるようにそれぞれの園で工夫をする必要があることが考察された。

【参考文献】

- 1) 石川洋子 井上清子 (2010) 保育士のストレスに関する研究(1)―職場のストレスとその解消―, 教育学部紀要, 文教大学教育学部, 第44集
- 2) 上村眞生 (2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究―保育士の経験年数に着目して―, 保育学研究, 第50巻第1号
- 3) 木村直子 赤川陽子 (2016) 保育士のストレス要因に関する研究―職場でのストレス要因・個人的なストレス要因に着目して―, 鳴門教育大学研究紀要, 第31号, p137 他.



第28回（平成30年度）研究大会発表資料（ポスター発表）

幼児および児童への音楽教育に関する事例研究

- 地域子育てイベントにおける「こども音楽教室」の事例から -

長友 洋喜

（安田女子大学 児童教育学科）

本発表は、筆者が保育者養成校において実践した、幼児および児童を対象としたキッズイベントにおける音楽教育および音楽活動の事例を報告し、考察を加えるものである。

対象となるイベントは、筆者の前任校である保育者養成校において行われた。前任校の地域における子育て支援事業の一環として、地域社会の園や小学校との交流、および養成校の学生のキッズイベント企画能力を培うことを目的として実施されたものである。対象となる学生は、地域の幼児、および児童に対する音楽的な活動を考え、それらを企画し、1時間という持ち時間の中で子どもたちに音楽教育および指導を行った。この実践を通じ、保育者として必要な音楽的表現力と指導力を身につけることも、目的とされた。

本発表で取り上げる事例は、2017年7月23日（土）に行われた「こども音楽教室」というキッズイベントである。担当教員は、筆者および、保育原理担当の教員の2名の専任教員であり、担当学生数は3名であった。また、地域の保育所、幼稚園、小学校には、2か月以上前からチラシを配布し、参加を呼びかけた。

イベントは、全3部構成にて行われた。第1部では、音楽教員である筆者のピアノに合わせて、学生と子どもたちが一緒になって身体表現をするという活動によって構成された。この活動におけるピアノ演奏、および使用した譜例は筆者の作成によるものである。しかし本活動の企画自体は、学生が意見を出し合い、イメージしたものを持ち寄って考案したものであった。

第2部では、学生による子どもたちへのダンス指導であった。この指導においては、伴奏はCDによる音源であり、振り付けは学生が企画段階で考案した、オリジナルの振り付けを用いた。学生のダンスを子どもたちが模倣する形をとった。また、本活動では、担当教員2名もダンスに参加し、進行も指導も学生主体で進められた。

第3部では、歌と手話の指導を、学生が子どもたちに行った。楽曲のピアノ伴奏は音楽教員である筆者が担当したが、企画段階で学生がホワイトボードに歌詞を書き、手話を覚えて、当日には子どもたちに対して指導できるように準備をした。また、歌の指導、手話の指導ともに、学生を子どもたちが模倣するという形をとり、楽譜を配布することはなかった。本活動も、学生が進行し、学生主体で行われた。

以上の3部構成の音楽指導および活動を、音楽室という限られた空間の中で、1時間という時間の中で行った。このイベントの実施によって、学生が子どもたちと共に活動をすること、および学生が子どもたちを主導するを経験することができた。それだけではなく、3歳から小学校2年生までの多様な子どもたちがイベントと一緒に参加することによって、音に親しむという表現の段階から、音楽教育という指導の段階までを、一定程度視野に入れつつ活動することが可能であることが明らかとなった。

以上を明らかにした本事例は、幼児および児童を共通の対象とした音楽指導の一助、ならびに保育者養成・小学校教員養成における、学生指導に対する一助となりうる点で、大きな意義を有する。

発達障害の児童に対する「やさしい無視」という指導方針に関する考察

—悩みを分かち合い、明日の実践を切り拓く交流の場としての「yasuda 学びのひろば」の事例から—

八木 秀文

（安田女子大学教育学部）

1. はじめに —「yasuda 学びのひろば」とは—

若い教師たちは、日々多くの悩みを抱えている。休日や平日の夜、研究室に相談に訪れる者も多い。メールやLINEで相談が寄せられることも頻繁である。

若手教師の悩み事は、共通している要素が多い。そこで、若手教師とのやりとりを、右のような記事に整理してネット配信し、学び合う材料として提供するネットサークル「yasuda 学びのひろば」を2011年から運用している。

2017年からは、新たな試みとしてOGや学生が集まる沙龙的なサークル「しゃべり場 in yasuda」を開催している。（月1回程度。会場は安田女子大学7410研究室）

2. 「やさしい無視」という指導の問題性

右の記事は、2018年5月の「しゃべり場 in yasuda」で相談を受けた事例を概観し、分析を加えたもの（一部抜粋）である。

発達障害を抱える子どもは、その特性上、どうしても「みんなと全く同じ振る舞い」ができないことがあり、「異質性」が際だって見えてしてしまいがちである。その異質性を一つの個性として学級内で認め合うことは、言うほど簡単なことではない。そこで、学校現場では「優しい無視」という、やや耳障りのいい言葉を用いて、当該児童に関心を向けないように指導するケースが散見される。だが、これは「異質性など存在しないことにして誤魔化す」という方法に過ぎない。その問題性を検討し、それ以外の指導方法を探っていく必要がある。

yasuda学びのひろば

「yasuda学びのひろば」は、安田女子大学児童教育学科のOGと学生による学習サークル。執筆。【Twitter版】→<https://twitter.com/yagichi2006> 【Facebook版】→<http://www.facebook.com/yasuda>

> 発達障害 > 「優しい無視」って、本当に「優しい」の？

「優しい無視」って、本当に「優しい」の？

<「優しい無視」という耳障りのいい言葉の裏側に>

新任の赤川先生（仮名）は小学校2年生のクラスを担当している。聡君（仮名）という男の子について、前任から「広汎性発達障害の疑いがあると思います」という引継ぎを受けている。

2年生に進級後も、授業時間・休み時間を問わず、「みんながジロジロ見てくる」「鼻を馬鹿にしている」と言って、先生に助けを求めることが頻繁にある。

授業中は、しっかり学習に取り組み、元気に発言もする場面が見られる一方で、何か困ったことがあると、大きなわめき声を出すことがある。そういう聡君の様子を見ながら、周囲の子どもたちが何かソソコソ話している様子も教員される。

前任に相談したところ、「周囲から異質な子として見られるのを避けるため、私は聡君の席を教室の端の方にして、『優しい無視をしない』と指導していました。」と教えてもらった。「私もそうしようかな…」と、赤川先生は思い始めているが、どことなく違和感を覚える。だが、他の方法を思い浮かべないから悩んでいるというのだ。

たしかに、「周囲から異質な子として見られるのを避ける」という意味では「優しい」ようにも見える。しかし、「無視する」ということは、あたかも「居ないことにする」と同じである。少々厳しい言い方になるが、それは「排除の論理」なのである。

どこの通常学級にも、発達障害を抱える子ども達が数%程度在籍しているという報告がある。世界的にもインクルーシブ教育の必要性が叫ばれ、「障害のある子どもが排除されることなく、障害のない子どもと共に学ぶ体制づくり」が目指されている。しかし、聡君のような発達障害を抱える子どもは、その特性上、どうしても「みんなと全く同じ振る舞い」ができないことがあり、「異質性」が際だって見えてしてしまいがちである。その異質性を一つの個性として学級内で認め合うことは、言うほど簡単なことではない。故に、聡君の前任のように「居ないことにする」という方法で、「異質性など存在しないことにして誤魔化す」教師が意外に多い。斯くして「優しい無視」という、やや耳障りのいい、都合のいい言葉が生み出され、学校現場で使われるようになってきているのである。

<子どもの願いと困り感にこそ寄り添って>

生活指導実践には、「答えは子どもに聞け」という格言がある。それは、「問題解決のヒントは子どもの中にある」という意味である。

まず、聡君の願いや困り感を読み解いていく必要がある。聡君は、赤川先生が大好きで、信頼しているようだが、学級の仲間からは信用できない様子。聞けば、昼休みには一人で本を読んでいることが多いらしい。しかし、時々同学年や他学年の子どもに混じって外で遊んでいることがあり、遊んだ後はニコニコしながら教室に帰ってくる。おそらく聡君は、本当はみんなと遊びたいのだろう。でも、ちょっと怖いのだ。聡君は、みんなのことを詳しくは知らない。逆に、みんなが自分のことをどう思っているかも知らないし、気になりだしたら怖くなってしまふ。つまり、「お互いを知らない」「何を考えているかわからない」という疑心暗算が、彼を不安にさせているのだ。

この疑心暗算を生じさせた元凶の一つが、「優しい無視」にある。生活指導実践には、「トラブルは自己紹介である」という格言がある。考えてみれば、トラブルとは、その当事者（たち）のこだわり、哀しみ、怒り、願い、要求といったものが、荒れた感情を伴って一気に吹き出している状況のことである。だとすれば、感情のもつれを紐解いていけば、その子の困り感や願いがくっきりと見えてくる絶好の機会でもあるのだ。それなのに、周囲が「優しい無視」を決め込んでしまったら、せっかく表出している聡君の困り感や願いに背を向けることになる。周囲の子どもたちが、聡君にどう関わって、どう心配したらいいいのかわからない。考える機会を逸してしまふ。

<「yasuda 学びのひろば」へのアクセス>

【facebook】



グループページ右上の「グループへの参加希望」をクリック

【ブログ】



【Twitter】



【メールリスト】



47038967@ra9.jp
へ空メールを送信

【LINE】



「学びのひろば購読希望」と送信

安田女子大学児童教育学会
平成 30 年度 第 28 回研究大会 『プログラム・要旨集』

発 行：平成 30 年 6 月 9 日

発行者：安田女子大学児童教育学会

広島市安佐南区安東 6 丁目 13-1

電話 082-878-9142